
空手紙

桜岩 琉歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空手紙

【Nコード】

N3753S

【作者名】

桜岩 琉歌

【あらすじ】

誰でも上を見たら当たり前にある空を通して、人と人がつながっていく。

そんな世界を、広げたくて。

遠くても気持ちは届く。かもしれない。

出会いは空を通じて（前書き）

海を隔てて愛し合った恋人達がいた。
彼らはとても幸せな時間を共有し、突然、別れを告げた。
しかし彼らは、なお愛し合っていた。

出会いは空を通じて

海の方こうつて言うとかかへん。同じ国なのにね。不思議だね。
島国だから仕方ないんだけど。

彼女はは遠くにいる彼を思い出して呟いた。
聞く者はいない。

少し冷たくなつた9月の空に消えた声。

夏に消えた記憶をなぞつた声だった。

はじまりのことは覚えていない。

ただブログに載せた写真が気にいって、どちらともなくアドレスを
交換した。

彼らは互いのメールアドレスしか知らなかった。

しかしそれで充分だった。

幸せだった。

確かに好きだった。

でも、今は過去形。背を向けて、歩き出すことを選んだ。

拝啓。

れいくん、お元気ですか？

あなたの道を進めていますか？

わたしは今から、少しあなたとの記憶の中を旅しようと思います。
いいですか？

．．いいよね、少しくらい。

鍵が錆びて記憶の宝箱開かなくなる前に。

突然の提案

始めのメールはただの自己紹介だった。

ーレイです（＾－＾＊）

交換ありがとう！

なんて呼べばいい？

I s a t o m i です。

こちらこそ。

サトでいいです。本名交換しますか？

返事は速い。

ー俺はレイでいいよ。

つか、本名だから！

さとみも本名だろ？

ー本名言った覚えないですけど・・・

ーいいーからいいーから

よろしくなー！

勝手に締めくくられたっけ。

わたしの名前、みさとですけど。名前入れ替えただけですけど。まあいいや。信じないし。

そんな始まりだった。

彼はいつも突然だ。

ーコーヒと紅茶ならどっちが好き？

俺は．．紅茶に入れるホットミルク派です。

というメールや、

ーパプリカは黄色の方が美味しい！

などと、

実にどうでもいい個人情報勝手にしゃべる。

それにはへえ、などと返していたけれど、そういった何気ないメールでわかった共通趣味がいくつか見つかった。

1番盛り上がったのは部活の話だ。

彼はサッカー少年だった。そしてわたしはサッカー観戦が大好きだった。

ゲームを見るのは楽しい。ハラハラする。

でも、ルールはよくわからない。

だから、テレビで試合を見ているとき、大概彼も同じ試合を見ていたので（わたしが日本代表戦ばかり観ていたから）、解説を求めてメールしたりした。

彼が審判の資格を取得いたためである。

ー今解説が言ってた、ハットトリックって何？

ー同じヒトが3得点するコト。ほら、さっきので3回。

ーホントだ。じゃあ、オフサイドは？なんとなくはわかるけど見極められない。

ーソレは慣れの問題じゃね？！（笑

ーそうかも（笑

そんな何気ない会話だった。

はやくから始めた受験勉強の息抜きに楽しんでいた。

そんな会話の延長線のように、彼は言ったのだ。

ーねえ、俺ら付き合ってみない？

そう。いつものように、それは突然受信された。

お願いします

付き合う？

付き合うつて何だ？

会ったこともないのに。

随分とご無沙汰な響きだった。

恋愛経験がないわけではない、異性と付き合ったこともある。

けれど、全て中学レベルで、高校に入ってから聞かない響きだった。

最後のお付き合いは2年前だったか。

気持ちのついていかなかった自分からフツてしまった。

ひどい終わり方だった。

もう二度と誰かと付き合ったりしたくない。

そう思う程に。

でも、でも、でも。

あれって好きになつてからだよね？

レイくんには好感は抱いているものの、付き合うのに必要な恋愛感情ではないよ。

どうすればいいの。

ー付き合うつてもアレだよ、メル彼になるだけだよ。

追い撃ちのようにメールが届く。

ーメル友と何が違うの？

返信してみた。

ーちょっと込み入った恋愛バナシもさせていただきます。
ラブラブのメール送ってあげるよ（笑）

そういうものなのか。

ーどの程度？

ーそーゆこと聞くなよな（汗）恥ずかしいだろお・・・
聞いてはいけなかったらしい。

ーね？どう？

つまり、今までとかわりなく話すだけ。でも。

ー好きなわけじゃないのに？

ーさとみはね？俺はさとみ結構好きだけどね。

さらっと言ってくれるではないか。

ー顔も知らないのに？

ー今度写メ送るよ。

何を言っても無駄だと思った。しかし根本の問題は好きだとか、それ以前に。
みさとに人を信じる気持ちがない。

もう気持ちなんか信じない、目に見えないし。
冷めてると思われるだろうか？

ー好きになれなくても？

ー俺がさせてやる。

つつつても付き合ったりしたことないからよくわかんないけど。
ダメ？

最初はお試してもいいけど。

そういうのもアリなのか。確か、前の彼もお試でいいといってダ
ラダラしていた。
そしてフツた。

同じようにはしたくない。例え彼が状況を変える気でいても。
あれこれと考えを巡らす。

そして気がついた。

わたしは人を信じきっていない。

いつも裏切られてきて、期待するのも嫌になってしまった。

自分が傷つきたくないだけだ。

わかってはいても、歩み寄って離されてしまうことが、恐ろしくて
仕方ない。

それを伝えなければ。

ーわたしはあなたをまだそれ程信用できません。

メールだけの間柄だし、怖いから。

かなりぼかした言い方をした。

返信に間があく。

ーそっか！

そうだよな。

会ったことないのに信用できんよな。

ごめん。俺が悪いわ。

そこで一度切れていた。

間を空けず次のメールが届く。

ー今までと変わんなくていいから。

メールしよ。そんだけ。特別じゃないし。

俺がちよつとだけ変えるからさ。嫌なら言つてよ。

ただ、何かあったときに、すぐに話したいと思える人になりたい。

ダメ？

彼はポジティブだった。

そして優しく、近付いてほしい、と言つてきていた。

そういうことなら悪くないかも。付き合うつていったって所詮メールの関係だ。

それなら。

ーわかりました。よろしくお願いします。

贈り物と、

それから2・3日は特に何も変わらなかった。
今まで通りのメール、内容も深くない。

ゆで卵の固さだとか、好きな色だとかの話で、充分楽しく過ごす。

そんな日々に、それは、突然やってきた。
レイの誕生日だ。

メールアドレスに入っていた数字が誕生日かと思って聞いて、数日後だと発覚したので慌てた。

メールで祝うくらいしかできないけれど。
ちよつと、何か違う色を加えたい。

しばらく考えて、わたしは彼が気に入っているという漫画のキャラクター（海賊マンガのヒゲをはやした剣士）のイラストを描いて送る事にした。

絵画を習っていたこともあって、絵は苦手じゃない。
それなりに納得したものを写真に撮ってメールする。

気にいるかな？

少しドキドキする。

恋してるみたい。あ、一応メル彼なんだっけ。

しかし、いつもは速い返信が、今日はなかなか来ない。
気がつけば1時間以上経っていた。

もしかして、気に障るような下手さだったかな。
心配になって送った写真をみる。

ああ、ちょっと暗くなってるな。

実物で色にこだわったところ、写ってないな。

迂闊にも写真を確認せずに送ってしまった自分にむしゃくしゃして、
布団の上を転げ回る。

ぐるぐる、ぐるぐる。

ごろごろぐるぐる。

「あー・・・」

ひとしきり転がったところで、長く息を吐き出した。

その時、携帯の振動する微かな音が聞こえた。

がば、と起き上がって携帯を開く。

予想通り、レイからだった。

「俺のブログ見た？」

へ？

ブログ？なんで？

「見てない

ーじゃあ見て

文字だけなのに、いつもより冷たい印象。

怖いな。

恐る恐るパソコンを立ち上げ、お気に入り登録されたURLを開く。

「あっ」

トップページが変わっていた。
見覚えのあるイラストが画面いっぱいに広がる。
タイトルは、

『HAPPY BIRTHDAY!!俺!!』

吹き出した。

なんだソレは。

記事を見ると、誕生日で何歳になったという報告と、イラストをブログ友達に貰ってトップを飾ることにした、というものだった。
なんだ。

怒ったわけじゃなかったのか。

少しほつとして、、でも。

ーかってにのせてー・・・

わざとひらがなで返信した。

ーイヤだった? (汗

今度の返信は速い。

ー・・・恥ずかしいから

ーいーじゃん!上手いよ、すごい。

俺の絵は恥ずかしすぎて見せられないけど (笑)

ーえー (笑) そう言われると見てみたい (笑)

ー勘弁してください・・・

今度は彼が萎れる番だった。

見せるだの見せないだの、しばらく問答が続いたあとだった。

ー今日は最高のプレゼントサンキューね！

レイから締めくくるメールが届く。

しかし、文章終わりに表示される、ENDの文字がない。

まだ文章があるらしく、カチカチと下にスクロールしたところで、固まった。

ーさとみのこともっと好きになっちゃったじゃん

え？！あ？！うわっ？！

ナニコレッツ死ぬほど恥ずかしい！！！！

落ち着けワタシ。

一応メル彼だ。

設定みたいなのははずだ。これくらい・・・。

もう一度、チラッとメールを見る。

ボタン。頭から机に落ちる。

完全に撃沈された。

頭から狼煙が上がりそうだった。

こんな風に変わっていくのか・・・。

みさとは、憂鬱なため息をついた。

ちょっとした変化

結局、あの恥ずかしいメールには返信できず、うやむやにして寝てしまった。

そして今日、

学校に着いた時に何故か思いだして、頬をほのかに染めるハメになる。

だって、だって。

いきなりあんなの。

と思ったところで考え直す。

わたしってそんなにウブだったわけ？

慣れてないっけ？

脳内検索をかける。

・・・うん、こういうタイプのひと、初体験かも。

いわゆる元カレは、大変なヘタレだった。

付き合いはじめてから知ることになるけれど、オタクで、

付き合っただけで、二次元にしか興味がなかったように思う。

気持ちを伝えられたことなんて、一度もなかった。

だからだろうか？

はじめての感覚に、少し恐怖を感じる。

この人、どこまで入り込んでくるつもりだろう。

からかってるわけじゃないかなあ？

恋愛慣れしてる人で、遊ばれてるんじゃないといいな。

ネットならいくらでも嘘がつける。

年齢だけでなく、性別まで偽る人がいるように。そもそも、彼が何故いきなり付き合おうなんて言い出したかも不明なのである。

特別な何かがあった覚えもないし。

ふむ、と、みさとは腕組みをした。
いつか聞いてみることにしよう。

「みさと、何考え込んでるのよ」

やや下げぎみの顔を覗き込む長い髪の影響が、視界を薄暗くする。

「綾乃っ。べ、別にいい？」

「なあに、真面目に勉強してたわけ？」

目の前に広げられた参考書をつまみ上げて、顔をしかめた。

「わっけわかんない。ってか、理系ってゆう人種のが意味不明！」

そこまで言うか、とわたしは苦笑いを浮かべた。

「なんでわざわざ文系の学校で理系になるんだか。
・・・でも、みさとは難関目指したいんだもんね。」

「うん」

わたしの高校は、私立の女子校だ。

大半が指定校で進学を決める文系重視の学校で、わたしのようにならば独学になるリスクを背負って理系を選択する生徒は大変珍しかった。確か、250人近くいる学年で、両手の指で数えるくらいしかないな

わたしは、その珍しいひとりである。

「理系だと、将来はがつつり働く女だね。カッコいい！」

なんか、みさとは旦那様とか要らないって言うタイプみたい」

「えー、そう？」

「じゃあ、例えば、彼氏とか欲しい？」

「・・・いまはそう欲しくもないな」

「ほらあ！」

綾乃が黄色い声をあげる。メル彼はいますけど、と、みさとは内心ツッコミをしておく。

「ま、相手は将来の話だもんね。

いつか考え変わるかもよ？」

まずは進路。

やりたい仕事があるから理系にしたとか？」

「うん・・・まあ」

「みさとは進路希望秘密主義だからなあ・・・むう」

ぶく、と頬を膨らませて綾乃が顔を近付けてくる。

「いまはいいけどさっ。」

いつかはちゃんと教えなさいよ！応援しにくいんだから」

「うん。でもまだ恥ずかしいから・・・。

もうちょっと、夢みてもよさそうと思えたら言う。

それまで許して？」

「わかったわかった。綾乃、応援してるからね！

それで受かんなかったら許さないんだから」

「はは・・・」

応援なんだか脅しなんだか。

綾乃は、わしわしとみさとの髪を乱してから席に戻った。

そういえば、レイって進路だとか、どうなっているんだろう？

これもいつか聞いておかなきゃな。

お互い邪魔するようではいけないし。

いつの間に、話題が彼に繋がっている。

そんな己の変化には気が付かず、思い立ったらすぐに行動するマイ
ルールに従ってメモをとる。

みさとは、それを筆箱に差し入れて次の授業の準備をした。

ちょっとした変化（後書き）

ようやく章の使い方がわかりましたorz

天使の梯子

一日が終わるのはあつという間だ。
気が付いたら授業が終わっていて、帰りのバスに乗って帰る。
毎日その繰り返し。

みさとは、窓際の席で頬杖をついて座っていた。

暇だなあ・・・。

バスの発車までまだ30分近くあった。

「ド」がつくほど田舎の学校では、バスの本数が信じられないくらい少ない。

帰りは1時間おきに3本のチャンスのみだ。

みさとはぼんやりと空を眺めていた。

持ってきた本は読み切ってしまったし、特にすることもない。
暇だ。

ため息をついたその時、目の前に広がる入道雲を、大きな鳥が横切った。

「あつ」

悠々と飛ぶ翼の広い大きな鳥。

すごい。絵になってる！

宮崎映画のワンシーンみたいだ。

見惚れていると、鳥が旋回してきてまた雲を横切った。

これは、もしかやシャッターチャンスをくれている？！

みさとは慌ててかばんからカメラを取り出すと、電源を入れて目の前で構えた。

もう一度戻ってくるのを待つて、タイミングをはかる。

．．．今だ！

カシャ、という音がして、画面に写真が表示された。

「やった．．．」

つい、声が漏れる。

なかなかの傑作だった。

みさとの写真コレクションは、パソコンのデータを全て埋めるくらいある。

全て自分で撮ったもので、ブログに上げたりして楽しんでいる。

『見ていて楽しい』

『幸せになれる』
『癒される』

といった評価が多く、その評価で、みさとも幸せになることができた。
誰かが笑顔になれる、そんなきっかけになるのなら、自分も嬉しい。

それにしても、いい写真が撮れたなあと満足していると、ポケットが振動した。
携帯がメールを受信したらしい。

ーやつほー！

今、ちよつといい写真撮れたからさとみにあげるよ。

入道雲です

レイからだった。

写真が一枚添付してある。ファイルが大きいのか、読み込みに少し時間がかかった。

「わぁ・・・」

携帯で撮ったのだろう、画質はさほど良くないが、みさとは、レイが見せたかった風景がありありと浮かんで見えた。

大きな入道雲、そして一筋の光が雲の間から差ししていて、街の中に淡く溶けているような。

まるで、はちみつを垂らしたような一枚。

この光を、古代の祖先達は、まるで神の通る道のように思ったのだろう。

とてもわかりやすい表現が、今にも伝わっている。

―『天使の梯子』が出ていますね。
とっても綺麗。

写真をどうもありがとう。

返信は速い。

―天使の梯子？

予想通りの返信が来て、みさとはふふ、と笑った。

―雲間から差す光のことです。光のカーテン、綺麗でしょ？
まるで神の通り道みたいだから、使者の天使を借りて、そういう名前が付きました。

雲の形状には、他にも『風の伯爵婦人』だとか、面白い名前がいくらかあります。

―そうなのか！。

結構深いんだなあ。

てか、なんでそんな詳しいの（笑）

―・・・趣味だから

―空以外も詳しいよね？！

ー・・・・・・・・多趣味なんです

うぐ、と詰まりながら、苦し紛れに逃れる。

本や図鑑を読みあさったなんて言いたくない。

が、好きなことならなんでもすぐに覚えられるものなのだ。

ーレイがサッカーに詳しいのと、変わらないよ。

ーなるほどね。

で、さとみはその幅が凄く広いつと（笑）

ーまあ、そういうことかな。

クス、と笑って携帯を閉じ、窓に寄り掛かって目を閉じる。
日当たりの良いバスの中を、まだ少しひんやりとした風が走り抜けた。

天使の梯子（後書き）

空って本当綺麗ですよ。

個人的に、HABUさんというプロ写真家がオススメ。

HP是非見てみてください。

彼ってやつ、悪くないかも

暖かい日差しの中で、うとうとしかけていたみさとは、今のメールのことを考えて薄く目を開けた。

自分がちょうど写真を撮った直後に、レイから写真付きのメールがきたのは本当に偶然だ。

住んでいる場所も、本州のみさとと、と北海道の彼では海を渡るのに、同じタイミングで同じことをしていたことになる。

しかも、それをわざわざメールしてきた。

そこまで考えて、頬がカツと熱くなる。

以心伝心？違うな。

なんか、波長が合う感じ。同じ時に同じこと考えたり、無理に合わせなくていいのってとっても楽。

メル彼、悪くないかも・・・

なんて考えながら、

ほてってしまった頬をペシペシと叩き、冷まそうと努力する。

「いよっす」

ひよっこりと視界に綾乃が現れた。

「隣いい？」

「あ、う、うん」

みさとは慌てて席周辺の荷物を片付けた。

「顔赤くしてどうしたの」

「えっ?! あ、いや、」

声が裏返る。

「もしかして彼氏?!」

ぎくつ。

「・・・なわけないか。みさとだもんねー」

綾乃がけらけらと笑う。

それはどういう意味だ、と苦笑いしながらみさとあはは、と声を出した。

レイは、彼氏とは違うけど、全く違うわけでもない。

バレたらちよつと困るなあ。

説明できない。

仕方なく、今回は適当に繕うことにした。

「日差しで、あつくなっただけ。ずっといるから」

「そかそか」

それで綾乃は興味がなくなっただけ、雑誌を開いて読みはじめる。時々、

「コレかわいくない?!
みさと似合いそ〜」

なんていいながら見せてきていたが、バスが発車する頃には完全に夢の世界を旅し始めていた。

安らかな寝息が聞こえる。

みさとも、まだ冷え切らない額をひんやりしたガラスにおしあて、仮眠することにした。

終点までの距離は、昼寝するのに十分な時間であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3753s/>

空手紙

2012年1月12日18時48分発行